Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2001.1
発行者：中島秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

NO.18

CONTENTS

・第 5 回「ファインプリント展」を振り返って
・ヨセミテ撮影紀行（後編）
・『ヨセミテ公園撮影ツアー』雑感（後編）
・ファインプリント展感想
・吉野光治郎さんの死を悼む（奥様からの礼状）
・インフォメーション

第５回「ファインプリント展」を振り返って

我々は、すでに４回の作品展を経験している。確かに作品のレベルは上がってはいるが、似たようなテーマがあったり、個々にいい作品があっても応募作品の少なさから充分なセレクションができずに展示せざるをえない場合もあった。今回の総合展は、多くの作品の中からいろいろな意味で評価の高かった作品をもう一度セレクションして展示することで、結果として研究会の総合的なレベルを外に向かって問うことにもなった。また、もう一度まとめて見たいという気持ちが我々にもあったし、見過ごしてしまった人達へのチャンスにもなった。そして、それは十分見ごたえのあるものになった。今回は、ギャラリーの企画展であるということも過去の作品展との大きな違いだ。このことは、我々の過去の活動が評価され

たことを意味し、研究会にとっては大きな成果であるといえる。そして、作品の最終セレクションも写真文化館の篠原氏にお願いし、遅れている作品や後で追加した作点もすべて篠原氏の了解をとった。展示してもいいのではないかと思う作品がはずされたり、プレス用の写真の選択も今までの我々とは違っていた。また、マスコミ関係へのDM 発送すべて文化館におまかせした。いつもの様にアサヒカメラ編集部へ出向くこともしなか

ったし、新聞社に電話して掲載をお願いすることもなかった。残念ながら我々の写真を各紙面で見ることはなかった。情報が錯綜する中では、まめに動き回らなければ趣旨は伝わらないということだろう。

会場での展示レイアウトに、キューレターとしての篠原氏の経験を見ることができた。私たちは篠原氏の指示のままに写真を動かし、取り替え、再び移動し、レイアウトを手伝った。レイアウトがほぼ固まったとき、篠原氏は全体を眺め、内田氏の作品を会場入口に移動した。内田氏の作品はすでに他の作品と一緒に並べられていたもので、この移動によって会場全体に動きと緊張感あるレイアウトになったと今でも思っている。私の作品も一面に展示されるなど考えてもいなかった。バラバラに展示することで全体のバランスをとるものと思っていた。細やかなレイアウトでもあり、また大胆

でもあった。照明のハロゲン光は、蛍光灯のあいまいな光と違って白黒写真に実に効果的だった。これは以前からの我々の要望でもあり、プリントバリューは広がって見え特に白と黒の美しさが強められた。しかし、照度は少し強すぎたかもしれない。 露出計で計ってみたが５００LUX 近くあり、他の写真ギャラリーのおよそ３００LUX を越えていた。この照度はアダムスが短時間に写真を眺めるときに求める光の強さで、もし長期間の展示であれば照明によるプリントの変質、乾燥による歪み、台紙の焼け等、何らかの問題がでてくるものと思われる。

今回の展覧会の新しい試みとして、“ゾーンシステム” と“プリントコレクションの楽しみ”の二つのワークショップを企画した。私の担当したワークショップは、すべてデモンストレーションで進め、受講者はそれを見るという方法で行った。私がしゃべり、内田さんにデモをお願いして撮影、現像、濃度チェックの流れを応接間、流し、展示会場とをフルに使って行い、偶然居合わせた人も聴講できる形になった。

二日目のプリント実習と撮影デモは貸し暗室に場所を移して行った。慣れない暗室での作業に正確なデーターが取れるのか気になったが、私と同じゾーンVI社の引伸機が設置されていて問題なく進んだ。しかし、当日は朝から雨で、予定されていた撮影デモができるか危うい状況になり、そこで、暗室デモを少し延ばすことにした。暗室で時間を引き伸ばしたのである。セーフライトチェック、最大白の確認、プリンティング、そして、コールドライトとコンデンサーヘッドによるプリントバリューの違いなど、予定には無くてもやることはいくらでもあった。雨がやみ終了時間を延長して撮影デモに移った。結果として我々の熱意が受講者に伝わり、アンケート用紙にも大変勉強になったという回答になって現れた。

受講者の中に写真家の鈴木秀ヲ氏がいた。写真家らしい質問や鈴木氏独自の解釈があって、講座に深みがでたことが他の受講者にとって収穫だったし、私にも勉強になった。鈴木氏の作品は創作的なものが多く、以前から彼の作品には大変関心をもっていた。いつか出会うことがあるだろう

と思っていたが、このような出会いに私は幸運なものを感じた。彼の作品はわれわれにつながるものがあるし、これからも研究会とパイプをつなげて行きたいと思っている。

荒井崇さん担当の“プリントコレクションの楽しみ”は、コレクターの白仁田剛氏をゲストに迎え熱いトークになった。荒井氏は収集した身近な作者のプリントを持参し、コレクションするに至った動機や作品をセレクトした理由を語った。それは単に写真をコレクションすることを越え、作品の意味や作者の方向性をも含んだ内容になっていた。荒井氏は、作者自身に関心をもちながらも純粋にプリントそのものに強い興味をもち、ときには作者の自宅まで訪ね収集したい理由を述べて了解を得るというスタイルをとっている。そして、プリントの保管方法にもふれていた。私にとってはこのスタイルには好感がもてる。一方の白仁田氏は、特定のギャラリーかそのオーナーの勧めから作品に入り、作者の説明と氏自身の思いが一致すれば収集するというスタイルをとっている。作品よりも作者自身とその説明しだいといえよう。そして、その説明が気に入れば、作者が好きになっていくと語り、別の作品を要求したり、次の作品を早く出すように迫ったりもするらしい。次から次と新作を発表する作家にはありがたい収集家といえるかもしれない。作者が収集家に脅迫されているようで、私はちょっと遠慮したい。しかし、両者とも身近な作者の作品を安いものから収集することをすすめていて、それがやがては作者をフォローすることにつながるし、写真全体のためにもなると語っていた。また、受講者からも収集の動機や収集することの大切さが語られ、楽しいワークショップになった。

研究会として公式な展覧会資料がないまま我々は５年間活動してきた。研究会の意味や活動内容を人に伝えるための資料の必要性は以前からあった。そこで、今回は展覧会の記録としても使え、資料にもなるリーフレットを作った。制作にあたってデザイナーに写真展の目的や意味を伝え、レイアウトや写真のセレクションのすべてをデザイナーにまかせた。そして、展示作品のすべてがユニークなレイアウトで表現でき、研究会の存在理由を正確に捉えた平木さんの文章も入り、記録としても、資料としても使える貴重なものになった。尚、今回のリーフレット制作に関わって、いつもながら印刷とプリントの間にはどうすることもできない歯がゆさを味わった。

展覧会終了日から一週間後、私は荷物を取りに写真文化館に行った。５階の展示ギャラリーでは、香港で撮ったと思える３５m／mカメラによるスナップ写真が半切から四つ切りほどの大きさでプリントされ、アルミのフレームに額装されていた。ドキュメントなまなざしのギラギラしたプリントからは混迷したアジアの現状がテレビニュ

ースのように伝わってはくるが、写真から美しさを感じることはできなかった。片隅に半切の大きさで２万円となっていた。このことはギャラリー・STAGE がこれからも実験的な写真の発表の場であり、学生もよし、コンポラもよし、ファインプリントもよしといったどこにでもある写真ギャラリーとしての性格を、これからも展開していくのだと感じた。

来年はいよいよ 21 世紀になる。特別な年だと考えるか、いつもと同じと考えるかは人それぞれだ。研究会にとってはどういう年になるのか。毎年展覧会をやり続けることに何か問題はないのか。会員をもっと増やす方がいいのか、それとも自然にまかせた方がいいのか。作品の内容を高め、プリントのクオリティーを維持していくにはどうするか。会員全体のプリントコレクションの意識はこれでいいのか。なにかテーマを決めて取り組むやり方がいいのか。これから皆さんとじっくり話し合う必要がある。時代は確実にデジタルに移行してきている。我々はそのこと自体にはまったく気にすることはないが、必要な器材や材料が手に入りにくくなることが少し心配でもある。そんなことより、銀塩写真でどれだけすばらしい写真がとれるか、それを皆さんとこれからも考えていきたいと思っている。

研究会 5 回展に関わってくれた皆様、ありがとうございました。お疲れ様でした。

ゾーンシステム研究会代表　中島　秀雄

ヨセミテ撮影紀行（後編）

6／4　5 時に目が覚めた。カーテンのすきまから外の光がもれていた。外に出るとちょうどモノ・レイクの対岸から陽が昇り始めた。資料を見るとこのモノ・レイクも年々水が減り続け、その対策にお手上げのようだ。もし普通に水があれば湖はもっと近くに見え、この二階のロッジからの眺めもきっと違っていただろう。この乾燥した空気が凄まじい勢いで水を蒸発させ、場所によっては湖底が見えているらしい。しかし、私にはこの乾いた空気がたまらなく気持ちがいい。体から不要な水分が抜け、自分が軽くなりフットワークがいいのだ。土足で部屋に入ることにも何の抵抗も感じない。レンズやプリントのカビなどまったく気にすることもないだろう。医学的なことは分からないが、空気中の雑菌も少なく、細菌による感染なども少ないのではないか。

我々は、古川、木下氏の部屋に集まり朝食にした。コンビーフ、煮豆、コーン・フレーク、りんご、ミルク、パン、そしてドリップ式のコーヒーが飲めた。完全にアメリカンスタイルだ。誰にも不満はなかった。増えた荷物を車に積み込み、ボディーに向かった。途中コンウエー・サミットで眺めを楽しんだ。ここはアダムスをはじめ多くの写真家が作品を残している。なだらかな丘の所々に白樺の林があり、残雪のシエラの山並みへと続いている。ここは眺めるだけにして、ボディーに急いだ。395 号線を標識にしたがって右に入り、曲がりくねった谷間の道をしばらく進んだ。すると大きな看板が目に入り、そこからはダートの道だった。しばらく進むとなだらかな丘の前方に古びた教会の尖塔が見え、集落が姿を現した。ついにきた！！乾燥した赤土と枯れ草、そして強烈な太陽の光の中に集落は黄金色に見えた。集落の位置はちょうどくぼ地になっていて、300m 四方に建物は集中している。教会、銀行、倉庫、住宅、雑貨屋、消防署、ガソリンスタンドまであり、19 世紀のゴールドラッシュへタイムスリップしたと錯覚してしまう。

＊1859 年ウイリアム・S・ボディーによってこの地で金塊が見つかり、そのときから多くの人々が集まってきた。1879 年にはおよそ 1 万人になっていて、所々に井戸があることから生活は不自由なかったものと思われる。

我々は、ロケーションもそこそこに撮影にとりかかった。強烈な太陽がふりそそぎ、反対側に深い陰を作る。普通ならマイナス現像だ。私は説明的な写真より強い印象だけを撮りたいと考えた。ほとんどの建物は中に入ることは出来ないが、一棟だけ入ることができた。開いたままになっている大きな扉が印象的で、床は歪み、壁ははげ落ち、ベッドやテーブル、椅子には埃がこびりついていた。私はこの椅子を見たとき、しばらく立ちつくしてしまった。以前どこかで見たことがあると思ったからで、しばらくしてそれがジョン・セクストンの作品の中にあったことを思い出した。彼の作品の現場に偶然立っていたのである。長いこと

写真をやっているとこんなこともあるのだ。私はこの椅子は人間の骨格の一部をデザインしたのではないかと思っている。作者はいったい誰なのか知りたくなる。私はしばらく眺めていた。他のメンバーはすでにそれぞれの場で撮影中で、どこにいるのか確認できなかった。強烈な太陽に焼かれ風化した木材の美しいディテールは、140 年の時間の痕跡を見ているようだ。窓のカーテンはちぎれて垂れ下がり、白い窓枠との構図が抽象絵画のようにも見えてくる。すべてがカンデンスキーの世界にも見えて飽きることがない。ガラス板のほとんどが歪み、そこに映る教会の建物も歪んで見えた。私は 210m/m のレンズを付けて構図を考え、乾燥した木材をゾーンⅣ、Ⅴ、Ⅵにすると白のカーテンはゾーンⅦ、Ⅷ、そして内側のシャドーはゾーンⅡ、になった。午後になると少し風がでてきて蛇腹がゆれた。

私は休息もかねて日陰でフィルム交換した。チェンジバックに手を突っ込んで作業していると観光客が声をかけてくる。“なにしてるの”“ウッドビューカメラいいね”“そこ通ってもいい”私はここで大きなミスをしたと思った。すべてが終わり、チェンジバックから手を引き抜き、チャックを開けようとしたらチャックはすでに開いていたのである。しまった（シャレではない）、閉めずにフィルム交換してしまったと思って大変悔やんだ。チェンジバックのチャックは内側と外側の二つに分かれていて、内側は閉まっていたので大丈夫だと思っていたが、内側のチャックは遮光にはほとんど関係なく外側を閉めなければ遮光は保てない。午前中のフィルムはすべてミスったと思い、がっかりしてしばらく立てなかった。気を取り直し、重要な所だけワンカット撮り直し 30 分以上時間を無駄にしてしまった。この件に関しては、私の全くの思い違いだったことを後で確

認することになる。暑さと乾燥、そして 2500m の高地による低い気圧が、無意識の行動に影響を与えていたのかもしれない。太陽の熱で大気が暖められ、上昇気流となって風が舞い上がる。撮影を一端中止して風を待たなければならず、時間がかかるようになってきた。4 時に一度車に戻ると、古川、木下、松本、山下氏は休息と水分補給のため、街に行くと言っていた。私はまだ何か満たされないものを強く感じ、一人だけ残してもらった。クローズまでの時間をいそいで歩き回ったが、後で地図を見てみると全体の 1／4 を歩き回ったにすぎなかった。ボディーに別れを告げ、ブリッジ・ポートへ向かった。私は後ろを振り返らずまっすぐ前を見ていた。体をシートに沈め、ぼんやりと外を眺めていた。起伏のゆるやかな丘が延々と広がり、遥か彼方の残雪のシエラの山並みへと連なっている。無限の大地、永遠の大陸、地平線の彼方、そんな言葉が頭をよぎった。もしこの地に生まれたら私はいったい何が出来ただろう、何になっていただろう。移民ではなくこの地で生まれないかぎり、この広大な地に立つことは出来ないだろうと思った。街の手前に牧場を突っ切って流れる川があり、その橋を渡るとそこがブリッジ・ポートだ。6 車線の道路をはさんで、その両側に商店が並んでいた。信号は一つもない、街に入った車は確実にスピードを落とす。絶対人間優先で信号は必要ないのだ。ベスト・ウェスタン・

モーター・インにチェックインした。アメリカに来て今まで何の不自由もなかったし、怖いと感じたこともなかった。まてまて、これから何があるか分からないぞ。それくらい順調だった。7 時を回っていたが街はまだ明るく、バーのネオンはかすんで見えた。我々は散策に出たが、どの店も閉まっていて人も少ない。落ち着いた街で、ホテルが目につくのはこの周辺には湖やキャンプ場があって、ここが観光拠点になっているからだ。またボディーにも近い。私は一軒の商店に足を止めた。閉められたガラス戸を通して店の奥に黒光りするライフル銃が見えたからだ。数年前アメリカに来たとき、雑貨屋にはかならずライフル銃は並んでいたが、今回この街で初めて見ることになった。規制問題で商店に特別な許可が必要なのかもしれない。しかし、簡単に開けられてしまうガラス戸から銃が見えることは我々には驚きだった。実は翌朝この店に立ち寄り、ライフル銃を手にじっくり眺めることになる。

夕食はホテルのカウンターで勧めてくれた街はずれのイタリアンレストランに行くことにした。街から 3Km ほど離れたところに、小さなレストランがあった。小さいとはいっても外見は赤や緑のネオンが光り、イタリア風とすぐかわる。店内には数人の客がビールを傾けていた。正面の壁には歴史を感じさせる多くのポートレート写真が展示され、また農具や工具が天井や壁に展示されていた。写真の人物はオーナーのファミリーで、祖父母、両親、子供、孫、そして、それぞれの家族だという。イタリアから移民しボディーに住み、やがてそれぞれの街に移り住んだのだろう。その曾孫がここのオーナーに違いない。古川氏はスパゲティーを注文した。しかし、イメージとだいぶ違っていたようだ。麺も柔らかく味もそっけない。ほとんど口には合わなかったようだ。異国で口に合う物を捜すのは大変で、旅を楽しくもつまらなくもする。料理方法を聞いても出てきて口にするまで分からない。私はこれも楽しみの一つと思っているが、グルメを目的としたアメリカの旅は、特に地方では難しいかもしれない。私は、多少慣れていることもあって、肉とパンと野菜とコーヒーがあればほかになにもいらない。アメリカはこれさえ注文していれば間違いないと経験から言えることだ。すっかり暗くなったシエラの空には星が瞬き、北斗七星と北極星が見えた。私はアメリカにいることに充分満足だった。

6／5 まだ暗い明け方、隣の部屋のシャワーの音で目がさめた。木下氏はすでに出かけていた。東の空は薄く色づきはじめ、私はカメラをとりに部屋にもどった。再び外に出ると、空は完全に燃えていた。私はカメラにまかせシャッターを切った。まだ暗い道路に出ると商店の屋根をシルエットに赤、橙、黄の黄金色で空を焦がし感動的だった。

方角は昨日のボディーの方向で、ゴーストタウンが一気に燃えているようにも見えた。商店の白い外壁をピンクに染め、歪んだガラス窓に反射し、その美しさを拡げていた。時間にして 7−8 分、そのドラマはあっけなく消えてしまった。

今日で我々の旅は終わる。フランス風のレストランで朝食した後、最後まで感動を与えてくれたこの小さな街とシエラの大気を確認するように、我々はゆっくりと歩いてホテルにもどった。再びシエラを横断するため山をめざした。高度はみるみる上がり、エンジンはうなりはじめた。9000 フィートのソノラパスの周辺や山頂には雪がまだたっぷり残っていて、糸杉が雪の重みでたわみ、折れ曲がり、枯れ木となって点在していた。しかし、濃い緑の針葉樹も多く、確実に夏に向かっていることは感じとれた。事前の情報では、ソノラパスは写真にはならないということだったが、ポイントはたくさんあると私は感じた。切り立つ岩壁、巨石、糸杉の古木、新緑と川の流れ。我々にはゆっくりロケする時間はなく、次から次へと目まぐるしく変化する光景に地名のとおりパスするしかなかった。急な坂を昇り切ると、今度は急板を下る、アップ・ダウンの繰り返しが続いた。しばらくしてゴムの焼ける臭いが鼻をつき、白い煙が前方に見え誰かが声をかけた。タイヤかブレーキが焼けている。せまい下り道で止める場所もない。しばらく走って車を止めた。前輪のブレーキが焼けていて、ホイールに触ることもできないくらい熱をもっていた。そういえば途中に標識があって、トラックはローギアを使えと書いてあった、しかし我々の車はトラックではないのでセカンドギアを多用していた。5 人が乗って満載の荷物、我々の車はすでにトラックと同じで、ローギアを使わなければいけなかったのだ。始めての道は時間が読めない。どうしても急ぎたくなる。その結果だった。道の両側は切り立った断崖で、谷にそって細い道が登り下りになっている。谷底は岩が入り組み、滝とも川ともいえない水の流れになっていて、ときどき水の音が聞こえてくる。ほとんど車は見かけないし、人を見ることもなかった。シエラネバダの深い渓谷の中にいる、そんな気分でもあった。やがて森林地帯に入り所々に家が見え、しばらく走るとストロベリーのキンプ場についた。ここに宿泊できれば走り抜けてきたソノラパスはゆっくり撮影できると思った。そして、ここからサンフランシスコまで 3 時間半くらいだという。休息もそこそこに我々は急いだ。しばらくしてソノーラに入り、ここから急に車が増え、信号もあった。下り車線は帰宅を急ぐ車ですでに渋滞していた。我々は上り車線で渋滞もなく順調に進み、オークデール、マンテカ、そして来るときに走った 205 号線に無事に乗れた。これで地図と睨めっこしていた私のナビゲーションは楽になった。

今回の旅行地図の作成には元会員の五来氏につくってもらった。氏はヨセミテに経験豊富で、この地図がなければこんなスムーズにはいかなかったと思う。改めて感謝したい。6 時をまわり、580 号縁の下りも帰宅の車で渋滞していた。マクドナルトの看板、風車発電が見えてきたことで全員が来た道と確認した。

靄のかかったはるか前方にサンフランシスコの高層ビルが見え、オークランド・ベイ・ブリッジも見えてきた。住宅街に入り、ダウンタウンに近づくにつれて車のスピードが落ちてきた。この先に料金所があり、さらにその先に信号があって、車の量をコントロールしているのだ。いよいよベイブリッジを渡る。右前方にゴールデンゲートブリッジが見え、手前にアルカトラス島が見える。ヨセミテ公園とは違う興奮に押さえられない気持ちだった。橋は夕方のラッシュで大渋滞だった。しかし、渋滞がこれほどありがたいと思ったことは今までなかった。地図を眺め街全体を把捉する余裕ができたし、海を眺め、街を眺めサンフランシスコをゆっくり感じることができた。

排気ガスの臭い、車の騒音、赤や黄の建物、ガラス、ステンレス、人工都市に戻ってきた。ここは山道と違い完全に区画化され、一方通行を行ったり来たりしてようやく街外れのモーテルに着いた。同ホテルはダウンタウンに計 6 か所あり、ここはもっともコストパフォーマンスにかなったホテルだ。中心街からはおよそ 1.4km 離れ、部屋にはエアコンはない。しかし充分だった。すでに 7 時をまわっていたがまだ明るく、レストランをさがしに外へ出た。落書きの壁を脇道に見ながら歩いた。閉店の店も多く、傍らに浮浪者がうずくまり、その向こうに高層建築がシンボリックに見える。様々な人種、様々な階層の人間によってこの都市はバランスされていて、それがアメリカの自由でもあり、パワーにもなっているのだろう。近場で安心できるレストランは少し大きめのホテルにかぎる。我々は、ホリデー・インに入った。ここでの野菜スープは格別にうまく、だれもが満足した。そして、話も盛り上がった。

2 年に一回研究会の定番撮影会にして、会員全員が一度ヨセミテに行けるようになるのが理想だ。ロケ地を厳選し一ヶ所に 2 日ほしい。口座をつくって積み立てていくのがいいだろう。すぐにもう一度来たい。バーナル滝からネバダ滝と登ってみたい。季節を変えてみるのもいい。もう少し早い時期がよかった。気候の変化もほしい。私はどの話ももっともだと思った。歴史にあこがれ、ギリシャやエジプトの地を訪れる多くの人々がいることを考えれば、我々はアダムスの写真に心を強く引き付けられた集まり、その地を訪れるのは自然だと考える。そのことを実行する集まりでもあるのかもしれない。アダムスの被写体に立ち向かい、撮影し研究することも会のテーマかもしれない。そして新たな素材やテーマを見つけることも出来るし、研究会の広がりにもつながっていく、そんな思いがしてきた。話は尽きなかった。

部屋に戻り、荷物をまとめた。明日の空港での手荷物検査にすばやく対応できるように、フィルムは別にしておく必要があった。私はX線の反応を知る意味で、トランクに一枚の未撮影のフィルムを入れてみた。現像の結果まったく問題なかった。ただ日本で一回、アメリカで一回のX線照射と、撮影済みのフィルムの場合、反応はどうなのか結論は出せない。今回は、空港のインスペクターに重要なフィルムの存在を話し、別検査にしてもらった。別検査に応じてくれない国、又は空港は何か対策が必要だろう。事前に充分情報収集する必要がある。国内の場合は、私は今までまった

く問題はないと私は結論づけている。

6／6　午後の便で我々はサンフランシスコを発たなければならない。外は明るくクリヤーで、昨夜と違って街のディテールはよく見えた。道路は通勤の車で混み合い、人の往来も多い。街はまだ眠りからさめたばかりといったところで、どの商店もシャッターは閉じていた。ホテルの向かいにあるアンティーク・ショップが気になっていたが、クローズの看板が下がったままで、ちょっとがっかりだった。ひょっとしたら銀板写真が見られるかもしれないと思っていたからだ。アメリカに来たら一度はアンティークショップを覗く、毎回そうしていた。黄、赤、青に塗られた建物の一角が朝日を受けてきわだっている。この原色に近い色合いも、カリフォルニアの乾いた空気と青空にまったく違和感はない。路地の落書きは今は強い日陰になっていて目立たなかった。ただ街外れということもあって全体として活気はなかった。私はとにかく中心街に続くマーケット・ストリートに出たかった。サンフランシスコの朝の活気を感じたかったからだ。並木の続く広い歩道に人が行き交い、車道にはタクシーや路面バスが走り、この光景に日常のせわしなさを感じた。メキシコ系、イタリア系、そして黒人と人種も雑多で、我々東洋人にまったく無関心に通り過ぎていく。歩道に連なる商店もまだ閉まったままで、ここが何の店なのか分からなかった。しばらく歩くとケーブルカーの発着地点に出た。腰にカギをぶらさげた小太りの係員が二人、車両の向きを変えている。それをじっと見ているのは観光客ばかりではない。ここは待ち合わせ場所にもなっていて、新聞を読む人、笑顔で迎える人、抱擁して別れるカップルも見かけ、これらの光景をじっと眺めるだけでも充分楽しめた。街の中心ユニオン・スクウェアーまでやってくると人の往来も激しくなり、様々な言葉が飛びかう。観光の街だから日本だと横浜といった所。その違いは何かと言えば、子供や若者が圧倒的に少ない。また携帯電話などほとんどもっていない。これも文化の違いなのか。近くにレストランを見つけた。ちょうど窓際の眺めのいいテーブルをセットしてもらい、フレンチ・トーストを食べ、ジュースを飲み、コーヒーを飲んだ。予定ではアダムス・センターを訪ねることになっていたが、現在は改装中で行けない。ここはフレンズ・オブ・フォトグラフイーの事務所にもなっていて、会員でもある私は一度訪ねたかった。他のギャラリー、美術館も時間が早すぎて見ることはできなかった。9 時を少し回ったところで、我々はホテルに引き返し、荷物を車に積み込む準備に取りかかった。私はフロントでチェック・アウトを済ませ、フリーウェーの入口を聞いた。レンタカー返却のためにガスも入れなければならない。目の前にあるガスステーションも一方通行をう

まくやり過ごさなければたどり着けない。一つ間違えるとまた最初からやり直しだ。私は山下氏とフリーウエーの入口と、その先のインターチェンジの出口を確認した。地図で見るかぎりこのインターも複雑で、行ってみるしかなかった。平面で書かれた複雑なインターチェンジを、経験的に立体にイメージして出口を決定する。今までそうして対処してきた。我々が降りるインターチェンジはこうだ。フリーウエーを空港に向かって 30 分ほど走る。するとフリーウエーを二つの道路が300 メートルほど離れて交差している。右側通行で走っている我々は二番目の道路を左に出たい。地図を見ると様々な脇道が入り交じっている。私の理解では手前のインターで脇道にそれ、一つの道路といくつかの脇道をやり過ごし、つぎの道路のインターを右に出てクローバーの葉のようにまわって左に出ると理解した。実際に行ってみるともっと複雑で、スピードもあり一瞬判断が遅れてしまい、一つ手前に降りてしまった。しかし、ここからが大事なところで、どのように対処すれば目的地にたどり着けるのか、考えなければならない。それには地図を十分眺め現在位置を確認し、そして人に聞く、これしかない。これが言葉を覚え街を体で知ることになり、今回の旅もこれをくり返して無事にここまでたどり着いた。ハイウェーで清掃中の日焼けした若者、140 号線を訪ねた住宅の女性と家族、スタンドにいたフェデックス社の運転手、バーナル滝の道を尋ねた二人、ガスステーションを訊いたヨセミテの女性レンジャー、給油の方法を訊いた若者、レストランを訊いた女性キャンパー等、訪ねた多くの人々は皆親切に教えてくれた。一人々の顔は今でも思い出せる。

広く、深く、険しく、そして美しいシエラの自然であった。そして、限り無く好奇心を奮い立たせてくれた地でもあった。アメリカの自然は見るためにある。見ることに楽しみと喜びを与えてくれる。そして、それを写真にできる幸福感をこの旅は与えてくれた。

ヨセミテに一歩足を踏み入れたばかりに、ピアノからカメラに切り替えざるをえなかったアダムスにとって、“見ること”こそ至福だと感じていたに違いない。そして、その延長線上にカメラがあり、ゾーンシステムの考案も、8X10 カメラの選択もアダムスにとって見るための必然だったのだろう。

我々は 1300Km 走ってシエラを一回りしてきた。しかし、地図を見ればカリフォルニアのほんの一部を回ってきたに過ぎない。このエリアを今後どこまで深め、広げられるか分からないが、このエリアだけでも足繁く通う価値はあると帰りの飛行機の中で思った。

次の方々に感謝します。
全行程に渡って地図を作成し、細かなアドバイスをくれた、五来英二氏。
ロッジの手配に頑張ってくれた、荒井崇氏。
ルートにアドバイスをくれた、土居圭司氏。
ボディーの情報をくれた、済藤隆義氏。
そして、このツアーの参加者、古川翔土氏、木下威氏、松本久子さん。
全行程の 3／4 をドライブしてくれた山下誠一氏。

7／10／2000　　中島秀堆

『ヨセミテ公園撮影ツアー』雑感（後編）

6／3＝6：00am.セダー・ロッジ出発。ロッジの庭先周辺には高山植物風情可憐な花々がなんともきれいに咲きほころんでいる。陽光に輝く早朝のマーセド河に沿って展開される大自然の息吹を感じると堪らずワンショットと脚をたてる。キラキラとミラー反射のよう、そんな光芒が高い岩肌からはじまり、森の木立に、そして急流の川面に差し込んでくる。先程までの静かなシルエットが刻々と生き返って動画になってくる。365 日、ヨセミテ渓谷に感銘のドラマは続く。⇒今日は山岳コースを縫ってリーバイニングへ向かう。早速, 縞枯山？の峠に差しかかる。大火事に見舞われ風化して行く雄大な山々の木々。立ち木のまま炭化して痛ましくさえあるが、これまた自然界のなせる美なのだ。誰かのオブジェをイメージして暫しシャッターをきる。⇒我がクルーにとって、これよりの山間コースは未知の世界となる。タイオガパスで車に燃料、クルーは水を補給。⇒広々とした湿原に横たわる大氷山のような白い岩山。⇒やがて遥か彼方にハーフドームが遠望され、このポイントはホルムスステッドポイントという。ヨセミテの北東部に位置して、雪渓の化粧衣をした標高 8000～9000ft の山々が雪解け水を渓谷に流し込んでいるのだ。⇒さらに十数マイルしてテナヤレイク、エンドレスウインター等などの残雪風景が次々視界に飛び込んできて「ラッキー！」と感嘆するばかり。白雲たなびく異国の山岳風景は得も言えず、その面展開、広がるスケールの大きさ、悉く感動的である。次々名場面の登場で本日の時間配分が気掛かりとなる。ドライバー山下さんのご高説があって、犬の散歩じゃあるまいし…ここは一気にリーバイニングのロッジまで直行となる。《実は左右ロケ・ロケ？しながら、2～3 箇所のポイントに絞り込み、スグさま引き返すこととした。》⇒残照のエリーレイクを撮り止めにして、再びガードレールなど何一つない怖い怖い急勾配かつ夜の坂道を延々とすべり下る。リーバイニングは西部の宿場町風情があって、これまたとても印象的。町並みと言っても 100m くらいだ。いつしかわがリーダー、テンガロンハットをせしめて、いやいや独りナカナカのサマ！。夜空に輝く北斗七星を仰ぎ見たり、静まりかえった小さな店々の看板情緒を楽しみながら、食後の散歩は 22：00 であった。

6／4＝6：00am.ベスト・ウェスタン・レイク・ビューロッジ出発。真っ青に澄み切った大空。清々しい朝だ。モノレイク湖の中にできた土柱群の景観がある。此処はロッジにあった絵ハガキで堪能することにして立ち寄りカット。朝一番の水鳥たちがまだ眠りこける湖面に、キラッキラッと眩しい光跡を残して水面を 2 分してゆく優雅な詩の世界があった。このモノレイクを眼下に眺めながら一路ボディへと冷え冷えする朝のしじまを割って R395 の彼方へ北進、金鉱の集落＝廃屋に向かう。⇒パステルカラーと言おうか淡いグレーの牧草で覆われた丘陵地帯が横縞模様になって、まるで砂漠のようだ。道路サイドに走る三本架線の原木電柱がユニークで、自然と調和していて和まれる。雄大なウェーブのある高原道路をまっしぐらに走り抜ける。真っ白に冠雪したコンウェイ（9945ft.）の裾野辺りで小休止。感極まったリーダー『俺はアメリカに生まれたかった！』《一同、う～ん》。こたびのツアーに向け一大決心しているはずの山下さん『うまい！！』と絶句する。その手に白いタバコ 1 本。⇒やがて R270 の砂利道

を砂煙りを巻き上げて東進すると、目指すボディに到着。柔らかい朝日もいつしか、陸の無人孤島、水もなく、乾き切った荒野に熱射となって燦々とふりそそぐ。風化した木造廃屋が点在する荒野の集落だ。その昔、金鉱石を夢見た西部のガンマンたちが往来したであろう。幌馬車はじめ西部劇には必ず登場してくるあの懐かしの時代用具の数々が無造作に、すっかり風化してあちこちに散在。まさに歴史のスクラップ場だ。しかし、いまそこにたたずむとそれらがある種のオブジェとなって蘇ってくるではないか。全体もよし、部分もよし。我がプロ集団？はまる１日、光と形のシーンを追い求めて、埃っぽい草原と灼熱の廃墟を駆け巡った。撮影終わって 18：00、強烈な紫外線を浴び、一挙に赤銅色と化した互いの顔手足をみつめて談笑ひとしきり。⇒夕陽が落ちるころ最寄りの宿場町ブリッジポートに着く。暑さから解放され、こじんまりした町をゆったり散策。ボディの歴史を受け継ぐという開拓時代の成功者の末裔がオーナーであるイタリアンレストランにて晩餐会。なるはど、壁いっぱいに、すっかりセピアに煤けている歴代の家族写真が張りつけられ、往時の繁栄振りを偲ばせてくれる。この夜も真っ暗闇の空にキラキラと星が輝く。

6／5＝7：00am.集合。筆者は 4：30am.朝焼けのブリッジポートを狙って暗がりの中、独りモーテルを飛び出す。果たして 5：00am.大空いっぱい真っ赤に燃える。頭上の大絨毯が刻々、紫・赤・黄と濃淡をつけて塗り替えられてゆく。見事な筆さばきをする自然界の絵師に驚嘆する。残念かな副題にしたい山並みや湖水の風景が伴わないのだ。写真術の見せ場もなく、一同の朝の散策隊に合流する。町の朝食喫茶にて田舎メニューをオーダー。はたして偉いボリュームにまた仰天。その後、日本滞在の経験があるブテックのオーナーでライフル銃だの、絵葉書だの、釣り道具だのと何でも有りの店を見つけて小物ショッピングを楽しむ。《6：30am. ～オープン》。⇒ここブリッジポートはリゾート地、観光に恵まれ、近くにブリッジポートリサーボイアー、ツインレークスがある。一部予定変更で尾瀬の湿地帯を幾つも配置したような景観地帯を縫ってツインレークスへ。湖上から見上げる白いイーグルピーク（11845ft.）の眺望は迫力満点。沿道脇にはアメリカ松が落とす無数のジャンボ松ぼっくりが余りに大きくそして美しい。幾つか新鮮なものを選りすぐってトランクへ。⇒再び、敷き詰められたグリーンの絨毯を踏み分け、ソノラ パス（9628ft.）がある北西に向かってグングン高度をあげる。行き交う車もまばらとなり、この山間道路を登り詰めると大パノラマの世界が開く。真っ青の空にシエラ ネバダの白い山波と純白の積雲、そのコントラストは素晴らしい。裾野に広がるクリスマスツリーの森と原野を気ままに蛇行して流れる川面の輝き、等など。まさにワイドレンズのシーンとなる。花崗岩の岩盤を裂き割って生える盆栽のような大木、辺りの老木は皆々三角錐形で古代史の森みたい。足下に雪、頭上からの熱射の中、野外食事はパンとジュースにフルーツ、わびしくてもうまい。《アウトドアーの T．P．0．たる折角の携帯ガスボンベは成田空港の出国チェックで没収されていた！》さて、リーダーから実質のツアー撮影打ち上げ宣言（14：30）があって一路、サンフランシスコに向けて下山コースに入る。⇒急峻な山々、急傾斜の下り坂、千尋の谷々、まるで車は滑り台を転げ落ちるように走る。遠近目まぐるしく飛び込んで来る大自然の光景に右往左往して楽しい旅路を満喫中だった。その時である。一大ハプニング発生、一同真っ青！透明な空気感の大自然の

中で薬品を焦がす異臭が漂うではないか？。透かさず、ご一同、『やや、そうだそうだ！』と異口同音。前方路面が視界にない大変な急勾配の坂道途上である。間一髪、50m くらいで車寄せに成功！前輪両サイドのディスクからは紫煙が吹き出している！寡黙の中で、たっぷり冷やした後、ちょろちょろ下山は言うまでもない。R108 に入って麓の村ストロベリーで小休止。⇒オークランドへあと 25 マイル、ヨセミテへ 70 マイルの R108/R120 合流点に着く。この辺りはまさにアメリカ牛の生産緑地で延々と続く。そして対向車線は通勤帰宅渋滞が始まり、初日昼食をとったレストランや風車発電の丘がみえてくる。風を受けて快調に回転する見事な光景がしばらく続くと、やがて 5 車線道路に入り、ベイブリッジを渡る。左右前後は赤・青の信号灯火と車の洪水に巻き込まれながら 9th St. のベスト・ウェスタン・シビックセンター・モーテルに無事到着（19：00）。この間、ず～とハンドルを握りっぱなしの山下さんへ、全員、唯々、感謝・感謝・感謝。『お疲れ様、ありがとう！』。シスコの夜はホテルホリデーインにて成功晩餐会。うまいビールで声高らかに乾杯。『リーダー、中島先生ありがとう！』

6／6＝7：00am. 早朝のシスコ　タウンウォッチでユニオンスクェアへ。KULETO´S なるイタリアンレストランにて朝食をとり、いよいよ 10：30am.～モーテルを後にレンタカーセンターの AVIS オフィスへ向かう。全行程の走行は 1300km、レンタル料金＄98.86（＝￥10800.）が精算された。空港では山下さんがクルーと別れ、シスコに残る。そして深夜 12：00pm. 親友の住むニューヨークへ向けて単独出発されるので、彼を残して日本に向かう NW027 搭乗の手続さに入る。『MR. ヤマシタ！バア～イ！』（12：30am.）。注目の通関チェックは先生のスピーチよろしくがあって、続いて『オーセーム！ハンドチェック プリーズ！』の古川さん、松本さん、木下揃って OK。14：00～NW027 便はフライト。帰途の機内では慌ただしく駆け巡ったツアーの一コマ一コマを思い返しながら、興奮気味に「ぜひ、もう一度！」が偽らざる実感であった。

6／7＝17：10 成田空港着。17：45 無事解散。

（おわりに）

今回参加させて戴いての個人的な結論は、客観的な撮影はできたものの、いわゆる作品にする写真撮影にはポイント探索時間の確保と処理能力を磨き、さらには皆さんが刻々ポラでチェックされての撮影態度を拝見し、あるべき姿を痛感しました。今後、願わくばゾーンシステム研究会の定番企画としてすべての会員がご経験されるために、2～3 年毎にこの企画がなされることを提案させて戴いて、拙く独断的な雑感を終わりとします。ありがとうございました。

2000．6．10.

謝々

木下威

ファインプリント展感想

以下の感想は、畑さんの友人である雲見さんという方の感想です。なかなか手厳しい感想で、この意見の全てを受け入れるべきとして載せたわけではありませんが、ある部分では、今後の活動における参考になるかもしれません。

昨日近くまで行ったので、写真展拝見して参りました。
どれもプリントが美しく、楽しみました。さすがゾーンシステムです。
もっとスペースが広くて、プリントが大きければいいのにと思いました。

おそらくトーンコントロール技術とそれに基づく写真的視点の練磨と継承を第一の目的としてらっしゃるんでしょうし、以下の批評は百も承知の上でストレートフォトグラフィーを追求していらっしゃるものと推察いたしましたです。
ですから私の戯言など釈迦に説法かと。

＊　＊

ハーフドームやヨセミテの写真は、模写として考えてよいのでしょうか？
静物にもエドワードウェストンっぽいのとかありましたし。
オリジナリティーはともかく、ああいうのを自分の作品として作り上げて、たとえば家に飾っておいて、お客さんが「おっ、アンセルアダムスのオリジナルプリント持ってるんだー」と感心したら、実は自分の作品なんだよ、と二度驚かせることできますよね。
それにゴッホとか印象派画家よる広重の模写とかも面白いですからね。逆にアダムスの模写なんだけど、そこはかとなく東洋的な自然観を感じさせる、なんて作品に仕上がったらとっても面白いんではないでしょうか。
ハーフドームの水墨画、みたいな。

＊　＊

皆さん感じてらっしゃると思いますが、印画サイズが小さいのはつくづく残念ですよね。もっと大きければ、プリントの美しさに圧倒されて余計なこと考えてる暇などなかったと思います。
また怒られてしまうかもしれませんが、たとえばアダムスの作品にしたって極言すれば大画面とそれを支える精細描写＆トーンの豊かさが全てであって、その何れかが欠けたら魅力半減以下のように感じます。
（ほんとはもっと奥深いものがあって、私なんかにゃ分からないのかもしれませんが。）
全紙オリジナルプリントに比べて写真集はいまひとつだし、スクリーンセイヴァーになってるPC画面の256bitじゃほんとに台無しですからねぇ。

と、また生意気言ってしまいました。

吉野光治郎さんの死を悼む
（奥様からの礼状）

梅雨空がもどってまいりましたが、その後、皆様お変わりなくお過ごしでございましょうか。
この度は御香料を賜わりまして誠にありがとうございました。

おかげをもちまして四十九日忌明けの法要を済ませましていくらか落ち着きましたものの心の中に隙間のできたような感じがします。
子どもの頃から父の影響で写真を好みゾーンシステム研究会の会員になり終生の趣味として極めていくつもりだったでしょう。

あまりにも短かすぎた亡夫の一生に悔みきれない思いです。しかし残された家族としては故人の生前のように明るく一生懸命生きていくことかと思います。

皆様の御厚情心より感謝いたしましてお礼とさせていただきます。

健康にはくれぐれもご留意くださいまして御活躍お祈り申し上げます。

末筆ながら皆様によろしくお伝えくださいませ。

六月二十五日

吉野　澄子

ゾーンシステム研究会会員一同様

Information

【売ります】

中島秀雄

ポラロイド４Ｘ５ホルダー５４５ｉ

２５０００円　新同様

ポラロイド４Ｘ５パック・ホルダー

２００００円　新同様

オメガ・上皿天秤（２００ｇ）

７０００円　新同様

ローリング・カッター（大四つ）

５０００円　中古

【トピックス】

中島先生自宅の標識が、リニューアルされました。

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。
前回より編集担当が、篠原から荒井に変わりましたので、今後は以下へ投稿願います。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．今まで同様、手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000
・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

荒井　崇